

日本における初期社会主義とトルストイ

— キリスト教社会主義者木下尚江・野上豊治の検討を通して・その1 —

上 條 宏 之

は じ め に

教文館から1990年1月以来発刊されている『木下尚江全集』は、私にとって渴望した全集であった。教文館版尚江全集は、まだ新たな尚江関係資料の発掘が予測されるので、そのまま尚江全集の定本にはなりにくい。しかし、同全集によって木下尚江研究はもとより、たとえば初期社会主義研究、日露戦争期研究の新たな進展が期待できる（上條宏之「書評 木下尚江全集 第一二巻 論説・感想集 1 思想形成期解明に不可欠の文章群」『本のひろば』第460号、1997年1月号）。私は、信州大学人文学部でこの二年、木下尚江を学部のゼミナールでとりあげている。全集を少しずつ学生諸君と解説していて、上記の諸研究が可能であることを再確認するとともに、尚江研究全体の今日的意味の大きさを、私は痛感している。

木下尚江を問題にする場合、同時代に尚江が及ぼした影響に私は注目したい。尚江の著書・小説・評論や演説の影響については、たとえば山極圭司『木下尚江 一先駆者の闘いと悩み』（理論社、1955年）の「序章」の、同時代における受け止められ方によって、その大きさを、私はまず知った。それは、近代日本においてかなり大きな仕事をした人々の、尚江の仕事にたいする受け止め方であった。私は、同時代における各地の青年たちへの尚江の影響にも、強い関心をもっている。

最近、私は木下尚江に深く傾倒した長野県下水内郡外様村顔戸（現飯山市）の農民野上豊治の蔵書と、彼の初期社会主義者としての交友関係をしめす葉書類を見ることができた。野上の読書は、木下尚江のほとんどの著作を初め、内村鑑三、幸徳秋水、島田三郎、安部磯雄、堺利彦、児玉花外、石川三四郎、徳富蘆花、山室軍平などから、サミュエル・スマイルス、トルストイ、カアペンターなどにわたる。野上の、尚江とともに、トルストイへの共鳴は顕著である。

一方、トルストイが同時代の日本に及ぼした影響の大きさは、今年1998年夏8月のロシアへの旅、とりわけトルストイの故郷ヤースナヤ・ポリャーナへの訪問と、8月17日の日本研究者とロシア研究者によるトルストイをめぐる学術シンポジウムに参加して、さらに確認できた。日本側からは、平岡敏夫「石川啄木とトルストイの日露戦争論」、井上理恵「トルストイと小山内薫・島村抱月・杉本良吉 日本近代劇運動におけるレフ・トルストイ」、中村青史「トルストイと横井小楠、徳富蘆花」、西田勝「トルストイと田岡嶺雲の文明批評」、中本信幸「トルストイと泉鏡花」の報告があり、トルストイの日本への影響が多角的に論ぜられた。尚江も深くトルストイを尊敬していた。

日本近代史における初期社会主義研究の意義は、荻野富士夫氏が「初期社会主義」を「産業革命期から独占資本主義確立期にかけて、資本主義の変革をめざし、自由・平等と社会の

進歩を希求した多様な思想群」と定義し、「社会主義国家」の崩壊とそれ以後といった今日の状況を踏まえてまとめた研究に、その主流の一端がうかがえる。荻野氏は、「初期社会主義」の時期を、1890年代後半から1920年代前半までの二十数年間とし、前期と後期の画期を1910年とみている（荻野富士夫『初期社会主義思想論』不二出版、1993年、27-9ページ）。

長野県における初期社会主義について、私は「今村真幸小論 国学者から日本社会党員への道」（和歌森太郎先生還暦記念論文集編集委員会編『明治国家の展開と民衆生活』弘文堂、1975年、のちに「国学から初期社会主義への道 今村真幸小論」と改題・補筆して上條宏之著『変革における民衆 『夜明け前』の実像』銀河書房、1994年に所収）、「山本飼山の思想形成と地域社会」（西田勝・上條宏之・荻野富士夫編『定本 飼山遺稿』銀河書房、1987年）などを発表している。

ここでは、長野県出身者あるいは長野県民で日本社会党員となった赤羽一（厳穴）・今村真幸・木下尚江（脱党）・野上豊治・若林浪江の五人のうち、野上豊治について考察してみたい。

野上については、松本衛士『長野県初期社会主義運動史』（弘隆社、1987年）が唯一の先行研究である。松本氏は、野上は1879年9月に生まれ、「自由民権運動の余韻の残る中で青年時代」を送り、二十歳のとき東京の履物屋に奉公したこと、彼が「社会主義運動と関わりをもつのは『平民新聞』が発刊された一九〇三年末から一九〇九年頃まで」であること、野上の活動の特徴は、「第一は外様村顔戸の青年たちとの日常的なつながりを基盤にした活動であり、第二には、社会主義機関紙誌および社会主義関係書籍の購読であり、第三は県内外の社会主義者との書簡による交流である」とまとめた（前掲書、156ページ）。野上の『日記』が松本氏の依拠した資料である。『日記』の分析から、松本氏は、野上の「思想の土壌は、キリスト教とトルストイに象徴される人道主義であり、その上に社会主義思想を受容している」（前掲書、163ページ）とし、1908年初めに「社会主義を去りて基督に行く」動きをしめしたことを指摘した。

野上が、下高井郡木島平村に聖書研究会を組織した藤沢音吉らと接触してキリスト教の影響を受け、トルストイの著作から社会主義に近づき、1904年に「余の理想の人物は露国のトルストイ伯なれば、余は伯に習ふ者なり、依て号を小トルストイとなす」というに至ったことを明らかにしている（前掲書、164ページ）。

私は、野上がトルストイに深く傾倒していった意味を、彼の読書、県内外のキリスト教徒・初期社会主義者との出会い・交流から具体的構造的歴史的に明らかにし、トルストイが同時代の日本に及ぼした影響と初期社会主義研究、木下尚江研究との接点をも解明したい。野上の初期社会主義思想の形成過程については、松本氏と異なった解明をおこなうこととなる。

一 木下尚江とトルストイ

野上豊治の検討に入る前に、野上がトルストイとともに深く敬慕した木下尚江のトルストイ理解について、大筋の特徴を明らかにしておきたい。

ロシアの文豪レフ・ニコラエビッチ・トルストイ Lev Nikolaevich Tolstoi (1828年生ま

れ、1910年没)が、近代日本の同時代に及ぼした影響は、文学界はもとより思想界においても極めて大きいものがあった。

トルストイの生涯は、『日本キリスト教歴史大辞典』(教文館、1988年)の小沼文彦氏の「トルストイ」(965-6ページ)では次のように要約されている。

作家。ロシア屈指の名門の子としてヤースナヤ・ポリャーナに生まれる。早くに両親を失った。カザン大学中退後、将校としてカフカスで軍務につき、志願してクリミア戦争に従軍。セヴァストポリ籠城戦で戦争の悲惨さをつぶさに経験した。自伝3部作(1851-56)と『セヴァストーポリ物語』(55-56)で作家としての地位を確立。新進作家、クリミア戦争の英雄として首都において乱脈極まる生活を送った後、1861年に故郷に帰り農業経営と農村子弟の教育に没頭。やがてまた文学に復帰し『戦争と平和』(63-69)、『アンナ・カレーニナ』(73-77)などの大作を発表して世界的な名声を得た。少年時代から人生問題に悩み、その解答を求めて思想遍歴を続けた。『懺悔』、『人生論』、『芸術とはなにか』、『イワン・イリッチの死』などの諸作はその軌跡で、その思想の集大成が晩年の大作『復活』(89-99)である。80年の転機以後、原始キリスト教に立帰り、悪に対する無抵抗主義を主張し、芸術もまた神のためのもの、愛を教えるものでなければ有害無益と断定。1910年苦悩の末すべてを放棄して家出を敢行、漂泊の途次、一寒駅で病死。トルストイ主義は内外に多くの信奉者を生み、無抵抗主義はガンディーに引継がれ、日本においても多くの作家や知識人に多大の影響を与えるとともに、武者小路実篤の「新しい村」、西田天香の「一灯園」による実践活動を促した。(下略)

木下尚江は、日露戦争期前後にトルストイの動きに注目した。主として、「転機」以後のトルストイにたいしてである。例えば、1903年11月4日の『毎日新聞』の評論「戦争と宗教」で、尚江は次のようにトルストイを評価した(『木下尚江全集 第一六巻』<以下、『全集 第何巻』と略称> 177-8ページ)。

露国の軍隊は世界創造の神を以て露国の為めに外国を打ち亡ぼし玉ふものと賛美敬拝す、是れ余りに好都合の茶番に非ずや、露国の真信者は曰く神は世界の神にして、万民は皆の愛子なるが故に、戦争は則ち瀆神の大罪なりと、故に彼等は兵役の罪を鳴らして死を以て之を拒みつゝあり『復活』の著者トルストイ翁の如きは則ち此の思想と信仰とを尤も明白に説明したる一個の代弁者に過ぎざるなり、

日露戦争における反戦・平和の思想・運動は、日本において全体からみればきわめて少数者のものであったが、木下尚江の反戦・平和の思想は戦争と軍備そのものを否定する強固なものであった。その強固な尚江の思想は、戦争の相手であるロシアの中であって反戦・平和を唱えたトルストイの原始キリスト教にもとづく思想への共鳴にも支えられていた。「国家最上権を排す」(『毎日新聞』1903・9・21、『全集 第一六巻』145-7ページ)で尚江は、トルストイを次のようにも評価した。

露西亜皇帝は仮面して玉座に倚れり、トルストイ翁は素面にて荒野に立てり、危懼すべきは、露帝の軍隊に非ずして、畏敬すべきはト翁の非戦主義に在り、我国またト翁を讚美謳歌するの徒に乏しからず、然かも彼等は相顧みて躊躇逡巡、遂に敬して之を遠けて曰く『然れ共翁は余りに極端なり』と、トルストイは極端なるに非ず、明白なるのみ、若し彼を指して誤謬と云はば尚ほ論理あり、極端として之を避くるは、必竟(畢竟か)

之を避くるものゝ薄志弱行を表白するに過ぎず、

木下尚江がトルストイに共鳴したのは、トルストイがキリスト教徒であったことと関係しているが、それだけではなかった。

日露関係が緊迫した1904年3月に上州前橋の友人から正教会信徒であるため「露探」と罵られていると訴えた手紙に関して、尚江は「流行の毒語『露探』」（『毎日新聞』1904・3・4、『全集 第一六巻』225—7ページ）を書き、「余は日露開戦の今日に於ける正教会徒の非境に対して満腔の同情を表するものなり、去れど余は信仰に於て正教会徒と殆ど黑白相容れざるものなり、何となれば余は正教会が無神論者と宣告し、狂漢と呼称するトルストイ翁を欽慕するものなり」と、尚江の日本キリスト教界における位置が、ロシアキリスト教界で異端とされたトルストイに近いことを明らかにしている。

尚江のトルストイへの関心は、まず第一にロシア革命に関するものであった。さらにはその関心はロシア革命とロシア宗教界との関わりから生じた。尚江の評論「露国革命の淵源」（『直言』2巻6号、1905・3・12、『全集 第一七巻』52—5ページ）は、その辺の事情について次のように論じた。

吾人は曾て十九世紀に於て「仏蘭西革命」に興味を有ちしが如く、「露西亜の革命」は廿世紀に於ける最も面白き問題たらんとすなり、（中略）静に露国革命の根本的原因を一考するを要す、

△吾人は露西亜国民の宗教を見ざるべからず、露国民ばかり世に宗教的国民なく、露帝専権の基本も此に在り、露国民反抗の遠因も亦た実に此に在れば也

△日本国民は宛然露西亜帝国の一敵国としてトルストイ伯を知り、クロボトキン公を知り、文豪ゴルキイを知る、而して真に彼等を知らんが為にも、吾人は露西亜の宗教を知るを要する也

ピョートル皇帝を中心とするロシアの近代化をたどった尚江は、「面白き哉、一方には露帝を神の代理として服従崇拜する者あるの傍に於て、露帝を悪魔の化身として仇敵視する多数頑強の人民あり、而してトルストイの如き何れも反正教會的野蛮感情を文明的に代表するものならざるは無し、彼等の出づる決して偶然に非る也、只だ夫れ此の野蛮なる反正教會感情と反露帝迷信とのみならば未だ以て革命を憂慮するに足らず、然れ共西欧の學術輸入せらるゝに至て事情は全く一変したりし也、合理的新信仰も是れより出でたり、合理的無政府主義も是れより出でたり」と論じた。「西欧の學術輸入」によって普遍性をもったと尚江が考えたロシア革命を検討する意義は、次のようにまとめられている。

露西亜には日本などにて見るべからざる無智の民あり、然れ共世界に於て有数なる偉大の学者ある也、露西亜には日本に於てさへ見るべからざる程の忠君愛国の農民あり、然れ共歴史に於て見ること稀なる猛烈の革命家あり、今や両者は世界環視の真直中に於て其優劣を競つゝある也、吾人は露国の騷擾に依て無限の教訓を発見せずんばあらず、

尚江が、ロシア革命への関心からツァーリズムへの反対派知識人としてのトルストイに関心を持った経緯がわかる。

尚江のトルストイへの関心の要因の第二は、トルストイが日露戦争へ反戦・平和の立場を表明したことにある。すでに取り上げた評論「国家最上権を排す」にそれは明らかである。べつに、日露戦争における満州の戦場からの兵士の手紙に仮託して、トルストイに言及した

次の文章にも、トルストイの戦争反対にたいする尚江の関心がうかがえる。すなわち、「クリミア戦争の大産物は、トルストイ伯をして軍服を棄て、平和博愛の徒たらしめたること也とは、曾て拝聴仕候ひしが、日露戦争の後、幾多の小トルストイが、我が軍隊の間よりも産出せられんことを、小生は聊か（も脱か）疑ひ不申候」（「戦場の洗礼」『平民新聞』29号、『全集 第一六巻』264ページ）といった記述がみえる。

ところで、尚江は芸術家としてのトルストイはどのように評価していたのであろうか。徳富健次郎蘆花がトルストイの影響を受けていることに尚江が注目していたことは、蘆花の著作『黒潮』にたいする新刊批評で、尚江が『黒潮』を「著者が令兄蘇峰氏に贈りて令兄と分袂せる一篇の大文章」と指摘し、蘆花が蘇峰と訣別した理由、「即ち経世の手段に於いても君は国力の膨脹に重を置きて帝国主義を執り、余はユゴー、トルストイ、ゾラ諸大人の流を汲むで人道の大義を執り、自家の社会主義を執る」とした箇所を引用して蘆花の立場を評価したこと（『毎日新聞』1903・3・3、『全集 第一六巻』33ページ）に明らかである。さらに尚江は、徳富蘆花のトルストイとの直接交流にも注目し、蘆花がトルストイと面談して帰国したとき、『新紀元』（11号、1906・9・10、『全集 第一七巻』242ページ）に「徳富健次郎君」を書いている。その文中で、「徳富健次郎君帰り来り、エルサレムの廢趾に耶蘇を偲ひ、ヤスナヤ、ポリャナの閑居にトルストイと語りたる彼は、何を抱き何を望で帰り来りしならんか。新国民は其の踊躍する胸を擁しつゝ、多大の希望を捧げて彼の一言一行をも聴き泄らさじ、見落とさじと競ふなり。」とエールを送っている。トルストイとヤースナヤ・ポリャーナで語り合っただけで帰国した蘆花の活躍に、尚江は期待したのである。

徳富蘆花は、1906年3月の初め、「ある日伊香保の山に雪を踏みて赤城の夕栄を眺めし時、不図基督の足跡を聖地に踏みて見たく、且トルストイ翁の顔見たくなり、山を下りて用意も匆々巡禮の途に上りぬ。四月四日横浜を出で、八月四日敦賀に帰る」旅をした。その旅については、上に引用した文をふくむ序文の載った徳富健次郎『巡禮紀行』（警醒社書店、1906年12月15日発行）として出版され、蘆花とトルストイとの交流のようすは「ヤスナヤ、ポリャナの五日」の見出しで同書に書き込まれることとなる。トルストイが死につながる家出まで住んだヤースナヤ・ポリャーナの家の書棚には、いまでも蘆花の『巡禮紀行』を見ることが出来る。

尚江の芸術家トルストイへの傾倒は、尚江の友人石川三四郎の評論「哲人カーペンター」（木下尚江著『野人語 第三』東京金尾文淵堂、1911年、のちに石川三四郎著、徳富健次郎序、木下尚江序『哲人カーペンター』東雲堂書店、1912年発行に収録）に一端がうかがえる。エドワード・カーペンター Edward Carpenter の紹介にあたって、石川は「木下兄、兄が最も愛慕した偉人トルストイ」（『野人語』69ページ）、「木下兄、カーペンターが、トルストイの感化を受け、トローに負ふ所ありと言ふを聞かば、カ翁の文明観も略ぼ察することが出来るであらう。」（同前、87ページ）と呼びかけ、カーペンターの論文集『天使の羽衣』からその芸術論を引用・紹介したのち、「木下兄、トルストイの芸術論を読める兄は、以上の所論に於て、ト翁より来れる多少の香気の漂ひ居ることを感ずるであらう。」（同前、101ページ）と語りかけている。尚江がトルストイの芸術論を理解していると、親友石川三四郎に認識されていたことがわかる。

なお、木下尚江著『懺悔』（金尾文淵堂、1906年発行）の執筆・発行の動機について、尚

江自身はトルストイの影響にふれていない。だが、同時代の書評に「トルストイの『コンフエション』を連想するもの」（1907年2月15日、『日本及日本人』第453号「玉石同架」）、「トルストイ主義の流行と共に懺悔なることも亦頗る流行の趣きを來たし、（中略）トルストイの我懺悔と木下氏の懺悔とは共に過去の罪過を自白して思想変遷の歴史を述べられたもの」（加藤）といった指摘があった（山田貞光「解説」『全集 第四巻』436—7ページ）。尚江の『懺悔』がトルストイの影響を受けたのではないかとする見方が存在したとってよいであろう。

木下尚江がトルストイに傾倒した時期のあることは、尚江自身の回想「旧友諸君に告ぐ」（木下尚江著『飢渴』、昭文堂蔵版、1907年）で自ら語っている。尚江は、平民社が一周年記念として発行した平福百穂の筆になるマルクス、エンゲルス、ラサール（ラザル）、ベーベル、クロボトキン、トルストイの六大人物の絵葉書を所蔵していた。その六人のうち、存命中のドイツ社会党の首領ベーベル、ロシア無政府党の領袖クロボトキン、キリストの使徒トルストイの三人の中では、「僕が精神の尤も愛慕し、趣味の自ら傾注する所のものは則ち、トルストイたらざることを得ざりし也。」（同前、405ページ）と尚江が述べているのである。

ただし尚江は、1907年11月3日、『日本及日本人』（臨時増刊号、『全集 第一七巻』277ページ）のアンケート「余の好める史的人物」の「西洋」の部に、ソクラテス、クロムウエル、ミルトン、ヴィクトル・ユゴウ、ワシントンの母をあげている。「虫の好く」といった基準だといっているが、トルストイはなぜか落ちている。しかし、野生のキリスト者を自称した尚江にとって、トルストイの存在はきわめて重要であった。

二 平民社とトルストイ

木下尚江のトルストイに関するおもな情報源は、平民社（1903年10月23日設立、1905年10月9日解散）においてであった。また、野上豊治も、『週刊平民新聞』（1903年11月15日創刊、1905年1月29日第64号廃刊）、『日刊平民新聞』（1907年1月15日創刊、同年4月14日第75号廃刊）を購読し、トルストイへの関心を高めたと推定される。

日露戦争にたいするトルストイの態度が『週刊平民新聞』で報じられるのは、第37号（1904年7月24日）の「世界之新聞」欄に「トルストイの戦争反対の大論文」が掲載された時期からである（労働運動史研究会編『明治社会主義史料集 別冊(4) 週刊平民新聞II』明治文献資料刊行会、1962年、以下、『平民新聞II』と略称）303ページ）。1904年6月27日の『倫敦タイムズ』にトルストイの日露戦争に関する十段にわたる論文が掲載されたことを、同紙はアメリカの新聞から引用するかたちで紹介した。『週刊平民新聞』の第39号（1904年8月7日）には、6ページにわたり、十二章からなる「トルストイ翁の日露戦争論」が掲載された。

同紙第40号（1904年8月14日）には「ト翁と日本の論壇」が載り、トルストイの日露戦争論は欧米の論壇を大いにさわがしたが、日本で全文をかかげた新聞は、『東京朝日新聞』と『週刊平民新聞』のみであり、他は加藤直士訳の一冊子が東京有隣堂から出る予定と報じた。本文は掲載せず、批評だけを載せたものに『国民新聞』『電報新聞』『読売新聞』などがあったが、平民社の立場から見ると、その論調は「要するにト翁に対する日本論客の意見は、非

戦論は露国に適切だが日本には宜しくないといふに帰着する、随分都合の善い論法」であった。「日本に於て強てト翁と同じ意見の人を求むれば、内村鑑三君一人位いなものだ、社会主義者の戦争に対する救治の意見は、内村君と異なる如く、ト翁とも異なるのだ」とも論じた（『平民新聞II』324ページ）。おなじ第40号には、冒頭に「トルストイ翁の非戦論を論ず」がかかげられ、平民社の日露戦争理解はトルストイと異なることを主張した。すなわち、「トルストイ翁は、戦争の原因を以て個人の墮落に帰す、故に悔改めよと教へて之を救はんと欲す、吾人社会主義者は、戦争の原因を以て経済的競争に帰す、故に経済的競争を廃して之を防遏せんと欲す、是れ吾人が全然翁に服するを得ざる所以也」（同前、323ページ）と違いを明らかにした。

さらに、同紙第41号（1904年8月21日）は、「世界之新聞」欄に「ト翁日露戦争論の勢力」（同前、333ページ）を報じた。ロシアでは、トルストイの日露戦争論が民間で読まれることを抑圧していたが、トルストイが『倫敦タイムス』とともにセントペートルの革命委員会にもおなじ文章を送ってあったので、秘密印刷されて全国に配布されていた。しかし、ロシア政府はト翁を直接弾圧できずにおり、その理由について、アメリカの雑誌『新時代』はトルストイを捕縛することは彼を野に放つより危険であり、トルストイをもし処罰すればロシアの不平の焰がたちまちロシアの内外に燃え広がり、容易に消えないであろうからと報じていた。

平民社訳のトルストイの日露戦争論の載った『週刊平民新聞』第39号は、再版も売り切れたので、トルストイの日露戦争論は第40号の「トルストイ翁の非戦論を論ず」とともに、文明堂から小冊子（四六版60ページ、1冊定価8銭、郵税2銭）として9月10日に売りだされ、10月2日には再版となった。

同紙第44号の「世界之新聞」欄は「杜翁に対する露政府の弁解」を報じた。ロシア内務大臣が『倫敦タイムス』に寄せた長文の答弁書は、次のような内容であった（『平民新聞II』357ページ）。

△杜翁の無政府主義はあらゆる国家（殊に露国）を破壊すべき勢力の一なるべし

△露国の謀叛人等は此際に於て殊に杜翁を傀儡として使ひ居れり

△日本の良友たる倫敦タイムスが、曾て杜翁の主義と何等の関係も無きに、此際此論文を載せたるは偶然の事にあらず

△然れども日本の政治家の策略は当らず、露国は之が為に解体すべきに非ず、露国は既に国民として結合せり、又大国民として結合する事の利益を悟れり

△杜翁の虚無主義、非国家主義、社会主義は露国の教育ある社会に於て全然勢力なし

同号はべつに、「杜翁非戦論に対する反響」で、日本国内の雑誌にあらわれた動きを概観した。『新人』（府下巢鴨村新人社、海老名弾正執筆）、『中央公論』（本郷区西片町反省社、成川生執筆）、『新仏教』（本郷駒込片町新仏教徒同志会、田中治六執筆）、『無尽燈』（府下巢鴨村無尽燈社）などの論調が、「杜翁は露西亜の予言者なるも日本の予言者にあらずと云ふものと、戦争の中には不義残暴ならざる者も（日露戦争の如にか!）ありと云ふものと、及杜翁は日本を誤解せりとするものの三種に過ぎず」と断言した。その中にあって、『時代思潮』（本郷森川町時代思潮社）は、『倫敦タイムス』の英文全文を付録として掲載し、「思ふに翁の理想は非常に遠大なり、従て国家民族の利を超えて直ちに人心の至誠に訴へずんば已

まず」と評価した。トルストイの理想の開陳にたいして日本では、「今日の政治家、宗教家、学者の現代謳歌は、余りに現実、余りに実利主義にして、その云為は益々私慾、奸譎、排擠の悪徳を助長しつゝあるにあらざるや」とする『時代思潮』のコメントを平民社の筆者は「意を得た」と評価した（同前、359ページ）。

その後の『週刊平民新聞』は、第58号（1904年12月18日）の「トルストイ翁の近況」が、ヤースナヤ・ポリャーナに居るト翁が壮健で、多くの外国人記者の訪問を受けていることを報じた（同前、471ページ）。また同紙の最終号で全体を赤で印刷した第64号（1905年1月29日）は、ハーバード大学書籍館において金子喜一が「吾人のトルストイに学ぶべき所は彼の理想ではなくて、寧ろ彼の理想を行ふ勇氣であるのだ。概して曰ふならば、吾人はトルストイ的たるよりも、クラポトキンのたるとの実際的で、而て又眞の改良家の態度を備へた者かと思ふ」と結論づけた論評「トルストイとクラポトキン」を掲載した（同前、521ページ）。

『週刊平民新聞』の主張の大筋は、みてきたように、宗教的なトルストイの日露戦争論を、反戦・平和論であるかぎり評価したが、経済的要因を無視しているとする批判的態度を表明していたのである。

三 野上豊治にみるトルストイと尚江

ところで、本論稿でおもな検討の対象とする、当時長野県下水内郡外様村顔戸の中農層の青年であった野上豊治のトルストイ理解は、どのようなものであったのであろうか。

松本衛士氏は、野上が「トルストイへの思い入れは強い」とし、彼が「平和主義、博愛主義、社会主義信者」（1905年日記表紙の見返し）と自称したのは、「キリスト教の上に立脚した発想」と評価した（前掲書、164ページ）。この「キリスト教」とは、いったいどのような内容を孕んでいたのであろうか。それを説明するためにまず、野上豊治が購読したと私が確認できたトルストイ関係書籍と、野上の読書時期・感想などについて一覧しておこう。書名のあとにかかげるのは、購入日時・読了日時・感想などを、購読した書物に野上書き込んだ記録・文章である。なお、書物の発行年は西暦で表記し、野上の購読年の括弧の西暦年は、野上の記述に私が補ったものである。

- ① トルストイ伯著・斎木仙醉訳『教訓小説集』（日高有隣堂、1903年12月18日発行）
明治三十七年（1904）十一月二十八日求 野上冷星
- ② トルストイ著、文学士橋本青雨訳『男女観 附録人生之意義』（金港堂書籍株式会社、1905年1月22日発行）
明治三十八年（1905）二月十一日求 野上冷星 二月二十八日読終る
「貧しき者は幸なり。悲しむ者は幸なり。即ち天国は其の人のものなればなり。」
「聖語 心の貧しき者は福なり。天国は即ち其人の者なれば也。哀む者は福なり。其人は安慰を得べければなり。柔和なる者は福なり。其人は地を嗣（ツグ）ことを得べければなり。飢渴ごとと義を慕ふ者は福なり。其人は飽（アク）ことを得べければなり。矜恤（アハレミ）ある者は福也。其人は矜恤得べければなり。心の清き者は福なり。其人は神の子と称らる可ればなり。義などの為に責らるゝ者は福なり。天国は即ち其人の物なればなり。二月二十八日夜、（裏表紙）「顔戸社会主義協会」「外様村顔戸社会主義協会会員之印 下水内郡」「基督信者」
- ③ トルストイ伯著、加藤直士訳『我懺悔』（警醒社書店、1903年2月26日三版）

明治三十九年（1906）七月十五日求 明治三十九年七月二十九日夜読終る

「余は当時の煩悶苦惱筆を以て描出する事能ず。余は本書に依て多少平安を得たとの感あり。」「此の書を求めしは今より丁度十五年以前なり。当時つかれたる余の心霊に慰安与へられたる書の一なりき。今再繙きて更に得る処ありしを感謝ス。大正十年正月二十一日夜記」野上冷星蔵書

- ④ トルストイ伯著、加藤直士先生訳『我宗教』（文明堂蔵版、1905年1月15日六版）

明治三十九年（1906）九月八日到着（第四章まで）九月二十日夜八時（第六章まで）十月二十日夜十二時 野上冷星蔵書

- ⑤ 徳富健次郎著『巡禮紀行』（警醒社書店、1906年12月18日再版）

明治三十九年（1906）十二月二十八日求 野上冷星蔵書 「トルストイ伯は本年満七十九才、夫人は六十三才、徳富健次郎氏は本年三十八年三ヶ月なり（明治四十年一月）」 明治四十年正月三日夜読了す 大正六年正月七日夜再読ス、感興益々深し 大正八年十二月二十四日夜十時三度読了、感更ニ新ナリ

- ⑥ 中里介山編著『偉人研究第二編 トルストイ言行録』（内外出版協会、1907年6月10日増補三版）

明治四十年（1907）十一月廿九日到着 十二月二日夜読み終る 野上冷星蔵書

- ⑦ 露国 レオ、トルストイ原著、日本 綱島梁川序文、日本 小田頼造訳述『人道主義 全』（株式会社隆文館、1907年11月28日発行）

明治四拾年（1907）十二月廿三日到着 四十一年一月十三日夜より読み初む 野上冷星蔵書

- ⑧ 加藤直士訳『トルストイ之人生観』（警醒社書店、1908年2月12日四版）

明治四十一年（1908）四月二十五日求 「余はトルストイ教の一信者にして、かつてト伯著我宗教、我懺悔、人道主義、教訓小説集、下僕生涯、馬鹿者イワン、男女観、人生の意義、人生の要する土地何幾、外に短篇小説及文章、徳富氏のトルストイ、中里氏のトルストイ言行録を読み、今又本書を繙くに至れり。余の光栄と云ふべし。明治四十一年五月記」「此の書購入して後にト翁の著、長恨、生い立ちの記、復活をも買ひ求めたり。アンナ・カレニナも追て購読致したきものと思ふ。」「トルストイ之人生観、即ちキリストの人生観を正解したるなり。基督教を研究せんと欲する者は一読の義務あり。」

- ⑨ 徳田秋江訳『生い立ちの記』（東京国民書院版、1908年10月5日再版）

明治四十一年（1908）十月二十三日到着、明治四十一年十一月十二日午後二時頃読了

「トルストイ伯の著書は余常に愛読する所なり。今又本書を購求するを得たるは余の光栄とする所なり。此の書誦読して精神修養上少なからぬ利益あらん事を期す。」（明治四十一年十月二十三日夜八時記）

「悲哀 道同じからざれば共に語らず。骨肉離散するとも友は売るに忍びず。惨風悲雨吾等が辿る荆棘の路多少の寂寥なきに非ず、悲哀なきに非ず、而も慣ては寂寥を寂しき悲哀を悲しむ。茲に至りて涙も酒の味あり」。(ケース)「喜びたい喜びたいと、喜びを先にすると、自力にて実験せんと云ふことになりて、いつの間にやら自力修養に陥るのである。喜ぶのが目的ではない。如来の愛にたよる一念の信が肝要である。求道。信仰即修養。中の一節 明治四十一年十一月十二日夜八時拜写 求道第五卷第十号」

- ⑩ トルストイ著・徳富蘆花序・嶋村抱月序・小山鼎浦跋文・佐藤緑葉跋文・筑山正夫遺訳『長恨 クロイチエル・ソナタ』（昭文堂、1908年10月15日発行）

明治四十一年十二月十九日到着 外様村顔戸 野上冷星蔵書 明治四十一年十二月二十八日読了

「吾人は人生の要務を知らざる可らず。既に之を知らば刻々之を踐行せざる可らず。何とな

れば、人生の一刻は乃ち人生の最后なる可ければ也 レウ、トルストイ」

⑪ トルストイ原著、羽生白玄訳『家庭の幸福』（東京堂書店、1909年1月1日発行）

明治四十二年（1909）一月廿八日到着 下水内郡外様村顔戸 二月十一日夜十時読了

「レウ、トルストイ翁の原著にして日本訳として短（刊か）行せられしものは左の如し。

短編小説集、下僕の生涯 戦争論、イワンの馬鹿、人生の意義、男女観、人生観、我懺悔、我宗教、アンナカレニナ、生い立ちの記、復活、戦争観、長恨」

「本書の訳は頗る拙劣である。しかしト翁の思想を多少酌む事は出来る。内容は原著者自身の半生涯の半面の描写らしく思はれる。」「閨秀の告白、妻君之自白」「笑楓園 野上冷星蔵書」

⑫ トルストイ原著、柴田流星訳『小説アンナカレニナ』（上田屋書店、1906年4月18日発行）

明治四十四年（1911）一月四日購求 長野県下水内郡外様村 持主野上豊治 十六日午前十一時読了

「レウ、トルストイ翁の著書に依りて得た思想上の感化大なる者である。彼は恩師である。我が再生の父である。彼れは八十二才を一期として昨年十一月廿日午前六時永眠したり。嗚呼悲哉。翁の長逝を紀念せんとて本書を買ひ求めたり。明治四十四年一月三日記 エデン園 野上冷星」

「世界の文豪レウ、トルストイ伯八十二才の誕生日に左の教訓を記念として家族の人々に自ら書き与えられたり。

『神の御旨を体して生涯を送れよ。社会改良に貢献する最も充実したる方法は唯此の一つの道に依てのみ得らるべきを信ぜよ。真正の生活とは心靈の為に浩き宗教的に向上して神に近くことなり。』

千九百十年八月二十一日 レウ、トルストイ」

「書中レビナと云ふ者はト翁自身なり。キッチーは翁の夫人なり。一七七頁は事実ださうな。」「読者の名簿 正月十六日読了野上冷星 正月廿日読了足立荷生 如月廿二日読了平井俵太」

⑬ 昇 曙夢著『偉人トルストイ伯』（春陽堂、1911年1月1日発行）

千九百十一年（明治44）一月二十七日購求 二月三日読了

「トルストイ伯の著書として余の所有せる者は、復活上下、生い立ちの記、我宗教、我懺悔、イワンの馬鹿、教訓小説集、下僕の生涯、人道主義、長恨、人生の意義、人生観、家庭の幸福、アンナ・カレニナ」

「明治四十四年一月二十四日未明の頃より、大逆罪を以て死刑を宣告せられたる無政府主義者二十四名中特赦の恩典に浴したる者十二名を除きたる左の十二名は本日死刑執行せられたり。

幸徳伝次郎 四十一、管野すが 三十一、森近運平 三十一、松尾卯一太 三十三、新美卯一郎 三十三、内山愚堂 三十八、宮下太吉 三十七、新村忠雄 二十五、古河力作 二十八、奥宮健之 五十五、大石誠之助 四（十）五、成石平四郎 三十 以上十二人

特赦の恩典に依て死刑一等を減ぜられし者左の如し。

坂本清馬 二十七、高木顕明 四十八、岸尾節堂 二十七、崎久保誓一 二十七、成石勘三郎 三十（二）、佐々木道元 二十三、飛松与次郎 二十三、武田九平 三十九（三十七か）、岡本頼一郎 三十二、三浦安太郎 二（十）四才、岡林寅松 三十六才、小松丑治 三十六才

懲役十一年 新田融 三十二才、同八年 新村善兵衛 三十一才

附記 判決言渡は去ル十八日なりき」

⑭ 徳田秋江訳『生い立ちの記 青年時代』（東京国民書院版、1912年2月10日発行）

明治四十五年（1912）三月二十五日求 信友足立源太郎氏と山田温泉入湯之際、飯山十字屋

書店に於て購入 長野県下水内郡外様村 野上豊治 (ケース) 野上冷星蔵書

- ⑮ トルストイ翁原著、落合昌太郎訳『悲劇 やみのちから』(文明堂、1914年5月20日十一版)
長野県下水内郡外様村 野上冷星蔵書
- ⑯ 昇 曙夢抄訳『トルストイ日記』(新潮社、1918年5月20日発行)
大正十年(1921)五月四日到着 「死ハ避け難い時ニのみ善である」冷星野上豊治蔵書

上に列記した16冊以外に、野上が購読したトルストイの著書には、『下僕の生涯』、『馬鹿者イワン』(内田魯庵訳、火鞭会、1905年12月)、『復活 上下』、『戦争観』、『人生の要する土地何幾(ママ)』などのあったことが、野上のメモからわかる。

野上がトルストイを本格的に読み始めたのは、上の一覧に明らかなように1904年(明治37)11月からである。したがって、1903年10月23日に設立され、1905年10月9日に解散した平民社の運動に共鳴した野上の社会主義的思想の基盤は、当初はトルストイの著作から学んだものということとはできない。また、松本氏は野上とトルストイとの関係が強まるのは、野上の社会主義から離れてキリスト教に帰結する要因となとしたが、その理解は、⑩『偉人トルストイ伯』に書き留めた「大逆事件」の判決の記録からも、私にはただちには首肯できないところがある。野上にとってトルストイは、内省面のキリスト教的人生観の師であった。

一方、野上の購読した木下尚江の著作のうち、私が見ることの出来なかった、すなわち野上が購読したはずであるが、私が実物で確認することが出来なかった『廃娼之急務』『火の柱』『良人の自白』などを除いた尚江の著書を一覧してみよう。括弧内の西暦年は私の補ったものである。

- ① 木下尚江著『懺悔』(金尾文淵堂、1907年1月10日再版発行)
明治四十年(1907)一月二十七日到着 一月二十九日夜九時
「噫々尊き告白よ! 噫々清き告白よ!」「昭和三年四月二十三日雪降り風寒き日読了」
- ② 木下尚江著『飢渴』(昭文堂、1907年4月3日発行)
明治四十年(1907)四月十六日到着
- ③ 木下尚江著『靈か肉か 上篇』(金尾文淵堂、1907年5月29日発行)
明治四十年(1907)六月廿一日到着 六月廿八日読了
- ④ 木下尚江著『靈か肉か 下篇』(梁江堂、1908年1月4日発行)
「明治四十一年(1908)三月十八日吾れ病ありて今井政公氏の診断を受くべく長野市に來り西沢書店に於て求む。」「十九日午後五時頃読了」「嗚呼明治四十一年!! 我に於ては大に紀念すべき年なり。我れ死して復活し年なり。」「今井医師は明治四十二年病死せり。」
- ⑤ 木下尚江著『小説 乞食 再版』(昭文堂、1908年7月16日再版印刷発行)
明治四十一年(1908)八月十二日購求 八月十八日読了 夜の十一時 「著者の思想よく描き出されてうれし。本書是にて終るとは思はれず。甚(必ずか)や后篇の出づる日あらん。(裏表紙)「天道主義者」
- ⑥ 木下尚江著『小説 墓場』(昭文堂、1908年12月13日発行)
明治四十一年(1908)十二月十九日到着 十二月廿一日夜九時読了
「余は著者を知りしは今より十五、六年以前廃娼論が世に盛んに唱えられた当時、毎日新聞主筆嶋田氏、木下氏との共著廃娼の急務と云ふ冊子を読んでからだ。以后著者の文章を愛読して居る。著者の関係して居られし新聞雑誌は凡て講読した。去る十月より発刊された雑誌新天地は遺憾ながら読まない。
毎日新聞、週刊平民新聞、日刊平民新聞、光、直言

以上は著者の関係した新聞である。雑誌で新紀元、新生活、新天地、世界婦人、ユニヴウサリスト等である。著述書では廃娼の急務を初め、火の柱、良人の自白、霊か肉（か脱か）、乞食、飢渴、我懺悔等である。何れも著者の歴史で又懺悔である。本書も経歴であらふと思ふ。然しまだ読ぬから確たる事は云えぬ。十二月十九日夜記「予想通り小説としては面白く無った。其の理だ。墓場だもの。墓前に立つ時は昔を偲ばれて懐かしいやら嬉しいやらの感想も湧き出るが、其の深奥には悲哀や寂寥の情が流れて居るは当然だと思ふ。廿一日夜記「読み終りてアッケ無い感がある。是にて終決（結か）を告るとは思はれぬ。主人公は完く信仰生活に入たとも書て無い様だ。聊か主人公の胸中に光明がかがやき初たかとも思はれる節は最後に燕石老人の教訓に依りて労働は神聖にして又人生の要務たることを自覚したるものゝ如し。とにかく著者半生涯の墓場だ。僕の前半生の墓—誰か知るものぞある—あり！我が父は知り給ふべし。」

- ⑦ 木下尚江著『小説 労働』（昭文堂、1909年6月5日発行）
明治四十二年（1909）六月二十六日購求 エデンの園守
- ⑧ 木下尚江著『荒野』（昭文堂、1909年10月15日発行）
明治四十二年十二月二日到着 明治四十二年十二月十一日夜十時読了 恵伝園
- ⑨ 木下尚江著『法然と親鸞』（金尾文淵堂、1911年2月10日発行）
明治四十四年（1911）二月二十五日到着 明治四十四年三月七日読了
「ぼくの云んと欲するところ説き得てめでたし」 大正四年正月十二日再読了
- ⑩ 木下尚江著『野人語 第一』（金尾文淵堂、1911年7月14日発行）
明治四十四年八月二十五日到着
- ⑪ 木下尚江著『野人語 第二』（金尾文淵堂、1911年11月5日再版発行）
明治四十四年十二月廿五日
- ⑫ 木下尚江著『野人語 第三』（金尾文淵堂、1911年12月13日発行）
明治四十五年（1912）一月廿日求

野上の最初に読んだ尚江の著書は、⑥『小説 墓場』に書き込まれたメモから、『廃娼の急務』（博文館、1900年10月発行）であったことがわかる。ほかに、上記の12冊に見えない書物で野上が読んだと推定される書物には、小説の『火の柱』（平民社、1904年5月発行）、『良人の自白 上篇』（平民社、1904年12月発行）、『良人の自白 中篇』（平民社、1905年7月発行）、『良人の自白 下篇』（由分社、1905年11月発行）、『良人の自白 続篇』（金尾文淵堂、1906年7月発行）がある。

野上は、④への書き込みで『毎日新聞』から尚江の文章を読んだとしているので、尚江の存在には早くから気づいていたと推定される。しかし、上掲の野上の蔵書からは、木下尚江の著書の多くが日露戦後に発行されたこともあって、日露戦後に購読した書物の多いことが指摘できる。これは、豊上の社会主義に距離をおく傾向が尚江の動きとかさなることを意味するであろう。

四 野上豊治の日露戦争以前

野上豊治の初期社会主義思想の形成過程について、松本衛士氏は、まず長野県下水内郡外様村の自由民権運動の影響を指摘した（前掲『長野県初期社会主義運動史』）。木下尚江（1869年生まれ）が松本の自由民権結社奨匡社の運動や飯田事件の影響を受けたことは明ら

かである（木下尚江『懺悔』ほか）。しかし、野上の生まれた1879年（明治12）は、まさに自由民権運動が本格的に展開しようとしていた時期にあたり（上條宏之「信陽自由党成立に関する覚書 北信地方自由民権運動研究序説」『信濃』III15—8・9, 1963年）、野上の少年時代から青年時代は、一転して自由民権運動が敗北したあとの、近代日本国家体制の確立期にあたる。

そこで、野上の蔵書などからトルストイや木下尚江に野上が深くコミットする以前における1900年代初めの野上の読書傾向を探ってみよう。すると、野上の初期社会主義思想形成の基盤の第一に、短歌・俳句への関心が、次のような蔵書から指摘できる。

- ① 今井菊堂編輯『万情万眉』（文学同志会、1900年10月10日発行）
明治三十四年（1901）一月二十八日仕入 南州生
「学進不退」「日月流水之如 光陰波失之如」「下水内郡外様村顔戸 顔戸青年会員 青年会評議委員 新声会 無声会員 草乃戸千浪生用」「岩の本千浪」「弓持てど雀もにげぬかかし哉」「池中に残月照し朝寒し」「我宿の梅の立枝や見えつらん 思ひ外に君は来ませる」「旅路して見帰ればある梅花 千浪」「涼しさや千代のためしに松の陰 千浪」「雁飛で海面青し小春哉」
- ② 内藤鳴雪選評・大塚甲山編輯『俳句選 第一編』（内外出版協会、1901年8月24日発行）
明治三十五年（1902）十二月十二日買入 艸乃戸主人
「かるた 折々は香水臭きかるた取り 千浪生」
- ③ みづほのや作『つゆ艸』（文友館、1902年2月15日発行）
明治三十五年四月三日仕入 同年五月八日読み終る 明治三十六年九月二十四日野沢温泉所旅舎亀屋 松第二十四号室読終る
「露艸序 本に向ひ月を眺ても人知らぬ興多く 居ながらにして国々名所をも知り草木の名をも覚え 春秋の移り替た有様をも弁へ 古への人を友とし得る心地するは歌なり 千浪」
「竹柏園千浪」
- ④ 内藤鳴雪選評・大塚甲山編輯『俳句選 第二編』（内外出版協会、1902年8月21日発行）
明治三十五年十二月二十八日 暮れの市仕入 戸へ田氏用
「新嫁の一人離れて田植かな 奉千浪」「身後千歳の名も生前一杯の酒に如かず 風流道人」
「編笠を脱げば涼しき女かな 草のと主人」「生徒集めて学校を開き教ゆる教師は文の親 小田切先生様」「竹柏園千浪」
- ⑤ 熊谷発之助（無漏）編『天明俳句集』（内外出版協会、1903年5月1日発行）
明治三十六年（1903）八月十二日求め 笑楓庵冷星 「天明集に題ス 妙句驚人 冷星生」

③の「みづほのや」は、長野県筑摩郡原新田村（現塩尻市）出身の太田水穂（1876年生まれ、1955年死去）である。みづほのやの短歌集『つゆ艸』は、太田が26歳のときの作品で、野上にとって3歳年上の太田の処女作であった。野上の読んだ短歌集には、べつに下田歌子著『家庭文庫 第三編 詠歌之栞』（博文館、1898年4月4日発行）があり、表紙に「草乃戸千浪」との書き込みがある。短歌集や俳句集とは違う野上の蔵書に、文学博士加藤弘之述『天則百話』（東京博文館、1902年3月19日六版発行）があるが、それには、裏表紙に「まよい子のなきなきつかむほたる哉 柴乃戸千浪 明治参拾五年四月十七日仕入」、おもて表紙に「竹柏園」といった書き込みがある。加藤の著書への関心より、俳句への関心の高さがうかがえる。

野上が文学に関心を高めた20世紀の開幕時は、ちょうど野上豊治の21歳、22歳当時であっ

た。彼は、外様地域の人々が強い関心をもった自由民権運動の敗北を経て、日清戦争後をむかえた時期、文学青年として青年会で活動していたのである。号を千浪から冷星とし、草の戸、柴の戸、竹柏園、笑楓庵などの雅号を名乗っている。④にある「小田切先生」とは、1902年（明治35）12月1日現在の「職員録」（『信濃教育会雑誌』第195号、1902年12月25日付録）にある下水内郡外様小学校校長の小田切駒次郎であろう。長野県下では、小学校教育の上に、実業補習学校への関心が高まっていた時期にあたり、教員と村の青年たちとの新たな交流が始まろうとしていた。

日清戦争後の1901年から1903年における地域社会の展開は、野上豊治に新たな読書傾向をもたらした。文学青年野上の短歌・俳句への関心は、第二の初期社会主義思想形成への展開の窓口ともいうべき、詩人児玉花外の詩との出会いによって、変貌を見せていく。

児玉花外・山田枯柳・山本露葉共著『風月万象』（文学同志会、1899年6月15日発行）を、野上は「明治参拾四年八月三日仕入」れた。そのおもて表紙をひらいた白紙の部分に、「風月万象序」があり、前掲③『つゆ艸』に書き込まれた文とおなじ「本に向ひ」に始まる文が記されている。野上の児玉花外との出会いは、1904年2月26日に平民新聞社からとくに取り寄せ購入した児玉花外著『花外詩集 附同情録』（金尾文淵堂、東京堂、1904年2月1日発行）、発行と同時に取り寄せた児玉花外著『ゆく雲』（隆文堂、1906年1月1日発行）、さらに1907年5月10日に野上の手元に到着した児玉花外作『詩集 天風魔帆』（平民書房、1907年1月1日発行）などの詩の愛吟へと展開する。花外著『社会主義詩集』は、1903年8月に出版されたが発売禁止となり、それにたいする木下尚江をふくむ59人の「同情録」が、『花外詩集 附同情録』に納められた。

野上の花外にたいする評価は、『風月万象』への書き込みにまづうかがえる。「花外氏の詩には、自由・平等・博愛・恋情・涙、あらゆる人生の感性潜みて実に天才の人たり。明治三十七年十一月十七日夜雪降りいたく寒き夜独り灯下に座して沈誦す。以外（意外か）の興を得たり。十時」とある。べつに「花外氏の胸中にはいつも革命のほのおもい（えか）て居り」などのコメントを何か所か書き残している。さらに『詩集 天風魔帆』には、次のようにある。

生は花外氏の詩を好む。氏の著に風月万象。花外詩集。行雲。社会主義詩集。天風魔帆。あり。何れも熱情燃るが如し。一度氏の詩集を繙かば血湧肉躍るの感あり。又叙景詩を読まば、さながらエデンの園に遊ぶ心地す。氏は楽天家の由。酒あらば終日終夜酔て寝ね、酒つきれば詩を詠む。明日の食を蓄ふる事無しと云ふ。実に天才の詩人なり。氏は熱心なる社会主義者なり。氏の詩は皆主義の見地より出でたり。氏本年三十五六才ならん。弟に星人なる詩人あり。三四年前より北米の地に有り。彼も社会主義信者なり。余は中心（衷心か）彼等兄弟の健在を祈る。明治四十年五月二十二日夜十時記す。冷星

詩人花外への傾倒以外に野上が初期社会主義に近づいた要因をさぐると、第三に、徳富健次郎の作品を熱心に読んだことが指摘できる。次のような作品が蔵書として残り、②の『黒潮 第一』への書き込みから、野上は徳富の他の作品も読んだようすがうかがえる。

① 徳富健次郎著『青山白山』（民友社、1902年3月22日再版）

明治参拾五年（1902）十二月二十八日仕入 「夜暮れていたく風の吟ぶ頃をい文の林に入らんとして巷辻あたりで恋の道に迷ひふみ込みし頃なり。竹柏園千浪生 改号 笑楓庵冷星」

「堂守の亡なりて後の落葉哉 千浪生」「艸乃門あるじ 千浪生」「蘆花先生書着るや、先生の深く自然を愛せられしことはおして知らるべし。」「愛読壺種」

② 徳富健次郎著『黒潮 第一』（黒潮社、1903年4月25日六版）

明治三十六年（1903）七月七日仕入 草の戸主人 「七月十八日読み終る 第二篇を早く見たきかな」「七月十三四日、此の二日病床にありて黒潮を読みたり。読書の面白さ、余の病痛を漲り（ママ）たるなる可し。記して以て枝折りとせん。千浪 草の戸に於て 千浪 七月十四日夜」「評 黒潮愛読者 政治に志ある者、文学に志ある者、家庭教育に志ある者、よろしく此の黒潮を味ひて読み玉ふ可し。たれか又徳富氏の筆力あるに一驚を喫せざる者あらんや」「徳富先生に感謝す 余は青山白山ト青蘆集ニ依て自然なる者（物か）を知り、不如帰を見て人情と潔白なる愛恋なる者を弁へたり。思出の記を読みて修養と辛抱、又和楽なる家庭の味を知った。黒潮第一巻を読みて政治家を養生すべき要と家庭教育法の好模型を得たり。然（而か）して文学の味を知りたり」「竹柏園千浪」

③ 蘆花生訳演『外交奇譚』（民友社、1902年3月1日再版）

明治三十六年十二月二十五日買求 笑楓庵冷星 野上豊治用

野上の『黒潮 第一』にたいする感動は大きかった。同書の第二の発刊について蘆花に問い合わせ、蘆花夫人からすぐには発刊の予定がない旨の返事を葉書でえた。野上は、その葉書を大切に保存している。恋の道に迷っていたころの野上の文学への関心が、徳富蘆花との出会いによって、詩歌の世界から散文・政治の世界への広がりをもつようになったことがわかる。繰り返すまでもなく、蘆花は存命中のトルストイを日本から訪問した数少ない作家である。

お わ り に

本論稿は、ようやく近代日本における初期社会主義とトルストイに関する事例研究の扉をひらいたところである。

私は本稿で、近代日本のトルストイ理解のうち、日露戦争期の日本初期社会主義とトルストイとの関係の解明を志し、まず木下尚江のトルストイ理解の一端と、その背景としての平民社における日露戦争をめぐるトルストイ評価を検討した。ついで、長野県における初期社会主義者におけるトルストイ理解の実体を事例研究のかたちですすめてきた。すなわち、トルストイと木下尚江とをとくに尊敬した農民野上豊治の蔵書の分析から、彼の初期社会主義思想形成の軌跡をたどり、自由民権運動の敗北後、近代日本国家体制の確立期、とくに日清戦後に、文学に関心をもった農村青年が、読書を通して初期社会主義に近づく経過をみた。

まず、野上豊治がトルストイの作品を何時どのように読んだのかからはいり、野上豊治の先行研究者である松本衛士氏のいうトルストイへの追慕が野上の初期社会主義思想の当初からのものでないこと、野上の初期社会主義への道筋には、俳句・短歌への関心、児玉花外の社会主義詩への共鳴、徳富健次郎の文学への傾倒と政治への着目などのあったことを明らかにしてきた。しかし、彼の思想形成について、さらに解明すべき問題に、野上のキリスト教との関係がある。いわば野上の初期社会主義思想の核となる部分である。また、野上豊治の生活していた地域社会の分析は、何ほどもおこなっていない。

これらの課題については、続稿で解明をめざしたい。

（1998年10月31日作成）